

2022年5月8日（日）「まことの父」

ガラテヤ 4:8-11

8 しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは、本来神ではない神々の奴隷となっていました。9 だが、今や神を知ったのに、いや、神に知られたのに、どうして、再び奴隷になることを望んで、あの無力で貧弱なもろもろの靈力に逆戻りするのですか。10 あなたがたは、日や月や季節や年などを守っています。11 あなたがたのために労苦してきたことが無駄になったのではないかと、あなたがたのことが心配です。

【序論】

人の人生は「旅」に譬えられることがあります、その類の格言は世に多くあります。
例えば…、

「人の世に道は一つということはない。道は百も千も万もある。」（坂本龍馬）

「旅じゃありませんか、誰だって人間の生涯は。」（島崎藤村）

「未知の世界を探究する人々は、地図を持たない旅行者である。」（湯川秀樹）

旅というものは、どこへ行き何をするかという目的が明確である場合もあれば、無目的に彷徨うものもあるでしょう。人生を歩み始めたばかりの子どもたちは、まだ「人生の目的」などということを考えることはあまりありませんから、親に言われるまま、社会の流れに乗かって生きていることが多いでしょう。しかし、自分とは何者なのかということを考える時期に差し掛かると、自分が向かっているゴールとはどこなのかという課題に直面します。自分はなぜ生まれてきたのか、何をするために生きているのか、100年にも満たぬ一生にはどんな意味があるのか。その答えを見出すために、人は宗教を求め、哲学を探究し、あるいはその謎を直視することを避ける人もいるかもしれません。いずれにせよ、人は道を探し求めているのであり、何らかの道が見つかった人もそれが本当に「真理の道」なのかどうかを問い続けているはずです。

私の妻の場合、思春期に差し掛かった頃から「変わることはない真理とは何か」ということを考え始めました。私の場合、子どもの頃から罪の赦しを探し求めて彷徨い続けていましたが、今になってみると当時の自分は神を探していたのだということがよく理解できます。私の祖母は多くの神々に頼り、近所の占い師のところへ足繁く通っていたそうですが、彼女は最終的にキリスト者になり、そのときに「一人の神」だけを信じることに心を定めたと言っています。今一度、自分の「道」とは何であるかを問いながら、御言葉に耳を傾けてまいりましょう。

【本論】

本論 1. 神を探し求める人々

しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは、本来神ではない神々の奴隷となっていました。(4:8)

ガラテヤの信徒たちのことをパウロは「神を知らなかった」と言います。これは福音を知る前の彼らの状態を指しています。ガラテヤという町は、紀元前 64 年にポンペイウスによって征服されてローマの属州になりました。ローマ帝国は隣国を次々と征服し勢力を拡大させていきましたが、宗教や言語に関しては比較的寛容で、属州の宗教事情にはあまり干渉しなかったといえます。よって、庶民は思い思いに宗教を選択し、幅広い多神教社会が形成されていたことが容易に想像できるでしょう。ガラテヤ教会の信徒たちも、元々はそのような価値観の下で生きていましたので、ギリシャの神々から占星術まで、あらゆるものを受け入れていたと思われます。

この箇所を学ぶなかで、北森嘉藏という人の注解を読んでおりましたら、面白いことが書いてありました。このような雑多な宗教事情がどうして生まれるのかを説明している文章を引用させていただきます。

「ここに一人の男の子が、ある事情で小さいときから父親に生き別れになっていたという状況をまず仮定いたします。この子供が物心つきまして学校へ行ったりし始めますと、ほかの子供たちは皆、父親を持っておりますので、自分も父親が欲しくなるわけです。その場合に彼は、おそらく町で出会ういろいろな人々を、自分のお父さんではなかろうか、あるいはお父さんであってほしいと考えたり、一人床の中であれかこれかと父親のイメージを描くでしょう。つまり彼にとっては、父親のイメージが、次々に複数で現れてくるわけです。そしてあれではないか、これではないかと尋ね歩くということが起こるでしょう。わたしたち人間は、ちょうどこの男の子のような状態にあるのではないか。《中略》これが、神を慕う心が人間に本来的に植え付けられているということでもあります。」(『ガラテヤ人への手紙講解説教』 p. 121)

ここでの説明によりますと、人間という存在は、自分の父である神様に会いたくて探し求めるけれど、誰が本当の父親であるかが分からず、あれにもこれにも心を向けてしまう。しかも、どうして自分がそういうことをしてしまうのか、その理由も分からず、本能的に神を求めて彷徨っているということなのでしょう。それは宗教であることもあ

れば、金銭や名誉への執着、あるいは特定の思想に傾倒するという形で現れる場合もあるといいます。ここで一つ分かることとして、人間の側からの探求では、何が真理であるかを見極めるのがどうしても困難であるということです。

本論 2. 神に知られた人々

だが、今や神を知ったのに、いや、神に知られたのに、どうして、再び奴隷になることを望んで、あの無力で貧弱なもろもろの靈力に逆戻りするのですか。(4:9)

ここでパウロは、まず「**今や神を知ったのに**」と一旦語り始めてから、直ちに「**いや、神に知られたのに**」と言い直しています。このことは、福音を知った人々は自分でそれを見出したようでありながら、実は神の側からご自分を現してくださったということを伝えているのでしょう。

教会の門を叩かれるきっかけはそれぞれ異なると思いますが、そうしようと思う背後には神の働きかけと導き、そして選びがあるということです。決して偶然起こったことではなく、神の御霊がその人のうちに働き、「ここにわたしがいるよ」「ここに真理があるよ」と教えてくださる。そして、聖書の救いのメッセージに対して心が開かれるのです。神の側がまず私たちを知ってくださった。そして、私たちも神を知るようになった。

ガラテヤの信徒たちも、罪の赦しの福音にふれ、神がただお一人であるということを知るに至りました。探し求めていた「父親」と出会ったのです。北森はこの神との出会いについて、次のように説明しています。

「問題は どうやって、まことの父と出会うかということです。聖書によりますと、まことの父とわたしたち人間が出会うのは、あれかこれかと尋ねまわるときではなくして、父親のほう为名乗り出て現れてくるときです。父親のほう、みずからを示すということで、これが神の啓示といわれる事柄です。」(p. 123)

このように、自分にとって真の父である神と出会い、一緒に生きることができるようになった。父の方が私たちを探し続け、見つけてくださり、見つかったその日から、法的に二度と切れることのない関係になったのです。「もう大丈夫だよ」「金輪際わたしの許を離れてはいけないよ」、そんな主の思いを聞き取ることができます。ところが、せっかくそのような平安を得たというのに、人間は「本当は父親ではなかった者」のところへ帰ろうとする傾向があるのです。それが、パウロの言っている「**どうして、再び奴隷**

になることを望んで、あの無力で貧弱なもろもろの靈力に逆戻りするのですか」という状態です。「もろもろの靈力」と訳された言葉は、4:3にも出てきた「στοιχεῖα／ストイケイア」という単語です。「初歩的段階の教え」とも解釈される場合がありますが、人がキリスト者となる前に支配されていた考え方や行動原理を指します。それは、本物を知る前にあれこれ自分で探求していたものであり、どんなに知識を積み上げても、苦行しても、決して救いに至ることができなかったもの、平安を得ることのできなかったものです。そのような人生の段階に再び戻ってしまうことをパウロは懸念している。それは、成人した人が再び幼児に戻ってしまうようなものだ。本当の父親と出会ったのに、父親ではない者のところに帰っていくことと同じです。

本論3. 再び神探しの旅へ

では、ガラテヤ教会の人々は実際に何をしていたのでしょうか。10 節にはそのことを示す興味深い言及があります。

あなたがたは、日や月や季節や年などを守っています。(4:10)

ここで言われている「日」「月」「季節」「年」というのは、暦の上で特定の日を定め、何らかの祭儀を行なうことでしょう。

日本にも神道に基づく年中行事があり、また陰陽道^{おんみょうどう}による六曜すなわち「先勝^{せんしょう}」「友引^{ともびき}」「先負^{せんぷ}」「仏滅^{ぶつめつ}」「大安^{たいあん}」「赤口^{しゃっこう}」によって日にちの吉凶が占われたりします。私はクリスチャンホームで生まれ育ったので、このような価値観とは無縁で来ましたが、日本人が何かにつけて縁起を担ぐ民族性を持っているということは学びを通して知るようになりました。

ガラテヤの信徒たちが傾倒してきていた暦とは、おそらくユダヤ教で定められている様々な規定を指すでしょう。「安息日」「断食日」「新月祭」「過越の祭」「7年ごとの安息年」など。彼らが本質的に「ユダヤ教徒」になろうとしていたところから、旧約律法を遵守する生き方を目指していたことが窺えます。

しかし、パウロは言います。「あなたがたはそんなことをしなくても神の御前に義とされた存在ではなかったか?」「神はそのような祭儀規定からも人を解放してくださったのではなかったのか?」。人は、神の恵みが見えなくなると、あれこれ付け加え、自分の探求によって神を見出そうとし始めます。しかし、それは「かつての私たちの姿」なのであり、ひとたび神に見出された人々が取る行動ではありません。神が見えなくなるから神を探すのです。彼らは教会生活を続けていながら、再び「神探しの旅」に出かけ始めていました。

あなたがたのために労苦してきたことが無駄になったのではないかと、あなたがたのことが心配です。(4:11)

ガラテヤの信徒たちの内実は、「福音が分からなくなってきた」ということです。これは私自身も最も恐れていることです。自分がいつの間にか救いを見失っていたということ、これより怖いことはありません。なぜか。それは神を見失った、再び父親とはぐれてしまったということだからです。迷子になり、途方もない旅へと舟を漕ぎ始める。大海原で、自分の力で神を見つけようとする。この世界には多種多様な宗教・思想があり、それらを調べて回ることも時として大切ではありますが、聖書の福音以外のものを絶対化し始めるのは危険です。軸がぶれることのないように、父の懷に居続けることが大切なのです。

【結論】

私たちが帰るべき場所がどこであるかを、常に心に留めて生きていたい。それは、日々神と共に歩むということであり、その生活の根幹をなす聖日の礼拝を大切にすることです。自分のまことの父と出会える場所として、教会は開かれています。礼拝に集うことが喜びであってほしい。見失っていた自分を取り戻すことができる場所、それが教会という場所なのです。私たちを愛し、永遠にご自分のものとしてくださっている父なる神様のところにこそ、真の慰めと平安があるからです。

【祈り】

私たちを愛し、見出してくださる、天の父なる神様。人は人生の道を探し求めますが、その道中いろんなものと遭遇します。それは時に危険な道へと誘うものであり、知らずして森の中へ迷い込んでいるということもあります。あなたが私たちに声をかけてくださり、安らかな懷へと招き入れてくださいました。再び迷い出ることがないように、常に導き、この心をあなたに向けさせていてください。そして、あなたの愛の中で自分の本来のアイデンティティを取り戻していくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
道に迷う者にやさしく声をかけ、帰るべき家となり給う、父なる神の愛、

「わたしが道であり、真理であり、いのちである」と、人の原点を指し示し給う、主イエス・キリストの恵み、
立ち返った者を常に支え、神との交わりのうちを歩ませ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。